第二章　光る源氏の物語　住吉参詣

［第一段　冷泉帝の退位］

*はかなくて(取り立てた事も無くて)、年月もかさなりて(年月も過ぎて)、内裏の帝、御位に即かせたまひて、十八年にならせたまひぬ(うちのみかどみくらゐにつかせたまひてじふはちねんにならせたまひぬ、今上帝がご即位されて十八年目を迎えられました)。　*「はかなくて」とあるが、これは公文書や記録書ではなく物語りである。御世代わりや地位の変動など無くても、日常の生活ぶりを語ればいくらでも話はある筈だ。取り敢えずは源君の子供も大きくなっただろうし。それに、上文で「さ言ひつつも二年ばかりになりぬれば」と一行で二年飛ばした上での、この文での更に四年飛ばしというのは、手抜きというよりは事故か作為に拠るものとしか思えない。しかし、一気に六年も飛ばされては、当時の実相を知らない私には何が伏せられたのかは分からず、当然にその伏せた意図など知る由もない。ただただ意外性に驚き、そういうものとして読み進む他はない。注には＜その後四年を経て、冷泉帝は譲位する。冷泉帝は十一歳で即位（澪標）。したがって現在二十八歳。源氏は四十六歳。つまり、源氏四十二歳から四十五歳までの四年間の空白がある。＞とある。

*嗣の君とならせたまふべき御子おはしまさず(帝には後継帝とお成りあそばすべき男皇子がいらっしゃらず)、ものの栄なきに(在位の張り合いが無く)、世の中はかなくおぼゆるを(空しく思えなさるので)、　*「嗣の君(つぎのきみ)」は＜後継帝＞という言い方らしい。

「心やすく、思ふ人びとにも対面し(気軽に会いたい人に会って)、私ざまに心をやりて(自分の興味のままに)、のどかに過ぎまほしくなむ(気楽に暮らしたい)」と、年ごろ思しのたまはせつるを(とこの数年お考えになり仰っていたが)、日ごろいと重く悩ませたまふことありて(最近ひどく体調を崩されたことがあって)、にはかに下りゐさせたまひぬ(それを機に御退位あそばされました)。

世の人(世評ではこの御退位を)、「飽かず盛りの御世を(まだこれからという御権勢を)、かく逃れたまふこと(このようにお離れ為さるとは)」と惜しみ嘆けど(と惜しみ残念がったが)、*春宮もおとなびさせたまひにたれば(皇太子も大人になっていらしたので)、うち嗣ぎて(帝位を継いで御即位あそばして)、世の中の政事など、ことに変はるけぢめもなかりけり(政府の施政方針などに特に変わる所もありませんでした)。　*「春宮」即ち新帝は、この年で 20 歳。

*太政大臣(おほきおとど、藤原殿は)、致仕の表(ちじのへう、太政大臣の辞表を)たてまつりて(新帝に奉って)、籠もりゐたまひぬ(政務を引退なさいました)。「世の中の常なきにより(世の無常に拠って)、かしこき帝の君も、位を去りたまひぬるに(畏れ多くも天皇陛下が御退位あそばしたのに)、年深き身の*冠を挂けむ、何か惜しからむ(年老いた自分が廷臣を辞するに何を惜しまれましょうか)」と思しのたまひて(とお考えを述べられて)、*左大将、右大臣になりたまひてぞ(後任の政務官人事で藤原婿殿の左大将が右大臣に昇進なさって)、世の中の政事仕うまつりたまひける(朝廷政務をお仕え申しなさいます)。　*藤原殿はこの年で推定 52 歳。　*「冠を挂けむ(かうぶりをかけむ)」は「挂冠(けいくぁん)」の意思を示しているようで、「挂冠」は大辞林に＜「後漢書（逸民伝）」より。漢の逢萌(ほうぼう)が王莽(おうもう)に仕えることを潔しとせず、冠をとって東都の城門に挂(か)け、遼東へ去っ

たという故事から＞と補説があり、語意は＜官を辞すること。掛冠。かいかん。致仕(ちし)。＞と説明されている。*藤原右家筆頭の源氏婿殿は本年 42 歳。

*女御の君は(春宮の御生母でいらした承香殿女御の君は)、かかる御世をも待ちつけたまはで(この晴れの御即位の日を待たずに)、亡せたまひにければ(お亡くなりあそばされていたので)、限りある御位を得たまへれど(皇太后の位を追贈なされたが)、ものの後ろの心地して、かひなかりけり(今更の感で権勢の誇りようもありませんでした)。　*「女御の君」は誰のことか分かり難いが、注に＜東宮の母承香殿女御はこれまでに死去。はじめてここに語られる。＞とある。章頭に「はかなくて」とあったが、これも其の内か。尤も、弘徽殿大后の死去すら、特には語られていないのだから、改めて全ては作者、が必ずしも為時女やその一団とは限らないが、の興味本位だと思い知らされる。が、それは当然に当時の読者の興味の在り処を反映しているに違いないので、物語の政略性を探る上では、こうした話運び自体にも何らかの意味合いを見つけ出せるのかも知れない。

*六条の女御の御腹の一の宮、坊にゐたまひぬ(桐壺妃腹の第一皇子が皇太子の座にお着きなさいました)。　*「六条の女御」は桐壺妃のことらしい。本年 18 歳。注には＜明石女御の第一皇子が皇太子となる。今年六歳。＞とある。桐壺妃の第一男御子は若菜上巻十章五段に五年前の話で「弥生の十余日のほどに、平らかに生まれたまひぬ。かねてはおどろおどろしく思し騒ぎしかど、いたく悩みたまふことなくて、男御子にさへおはすれば、限りなく思すさまにて、大殿も御心落ちゐたまひぬ。」とあった。その男御子を「一の宮」と呼称するには、妃が既に第二子も儲けていることを知らせているようだ。これも「はかなくて」の内らしい。

さるべきこととかねて思ひしかど(それが順当な事の運びと女房目にも思っていたが)、さしあたりてはなほめでたく(実現すればやはり目出度く)、目おどろかるるわざなりけり(目を見張る立太子式なのでした)。*右大将の君(右大将だった源君は)、大納言になりたまひぬ(大納言に成りなさいました)。いよいよあらまほしき*御仲らひなり(いよいよ御繁栄の源氏御一族です)。　*源君は本年 25 歳。もう、そろそろ中堅だ。　*「なからひ」は＜一族＞。

六条院は、下りゐたまひぬる*冷泉院の、御嗣おはしまさぬを、飽かず御心のうちに思す(六条院源氏殿は御退位あそばした冷泉院に御後継がいらっしゃらないのを残念なことと内心お思いになります)。　*「冷泉院」は注に＜初めての呼称。退位後、冷泉院を院の御所としたことがわかる。またこの帝の呼称にもなる。＞とある。史実の「冷泉院」については、Wikipedia に＜平安時代の天皇の累代の後院（ごいん、譲位後の御所）の一つ。大内裏の東に隣接し、左京二条二坊、大宮大路の東・二条大路の北 4 町を占めた（現在の二条城の北東部分に該当）。多くの殿舎を備えた寝殿造であったという。弘仁年間頃に離宮として成立、弘仁 7 年（816 年）嵯峨天皇が行幸したことが記録上の初見である。天皇は譲位後ここを後院として、承和元年（834 年）まで居住した。≪～中略～≫天喜 3 年（1055 年）に殿舎を取り壊して一条院へ移築、以後の消息はよく判っていない。近年敷地跡である二条城内の発掘により、かつての冷泉院の庭園遺構が見つかっている。＞との記事があり、大辞林には＜平安時代、京都堀川西にあった建物。弘仁年間（810-824）に嵯峨天皇が造営。その後代々の天皇・上皇が後院・里内裏(さとだいり)とした。＞とある。この物語は史書ではないが、江戸時代の狂言戯曲よりはよほど実体に準じていると見做せそうだ。

*同じ筋なれど(冷泉院の皇子であっても桐壺妃腹の皇子であっても、同じ源氏殿の孫に当たる血筋なのだが)、思ひ悩ましき御ことならで、過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて(何はともあ

れ正式に皇位を継がれた冷泉院は御在位中に、御自身の出生の秘密を聞き知りなさったものの、それに思い悩んで押し潰されなさることなく勤め切りなさったので、血筋はともかく臣下身分の源氏胤が皇位を襲うという罪は露見しなかったものの)、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世(それを正式な血統として子孫に継承することは適わなかった御運勢を)、*口惜しくさうざうしく思せど(無念で物足りなく御思い為さるが)、人にのたまひあはせぬことなれば(他人に話して共感し合える事では無いので)、いぶせくなむ(気分が重く晴れません)。　*「同じ筋なれど」は注に＜冷泉院と東宮をさす。＞とある。この文は少し混み入った構文だ。この「同じ筋なれど」という条件提示を受けるのは「末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世」という主文対象名詞で、その形容述辞が「いぶせくなむ」ということのようだ。で、「御宿世」の「御」は＜冷泉院＞を示すので、挿入補説文の「思ひ悩ましき御ことならで、過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて」の主語は冷泉院となるようだ。という構文なので、「罪は隠れて」の接続助詞「て」は「ばかりに」の理由説明を受けて＜～だっただけに～したものの＞という言い方で、逆接で下文に続くという事らしい。それはそうと、さて、暗く横たわる絶対禁忌を犯した話の筈なのに、また実際、この話の中でも、藤壺入道宮も冷泉院も、さすがに源氏殿も当事者として相当に苦しんだ様子ではあり、数少ない関係者も重い影を背負ってはいたようだが、何故か何処か、こんなことは、有って当然とは言わないまでも、有っても不思議ではないと腹を括ったというか、然して驚かないような語り口が全編に漂っているように思えて、逆に此方が奇妙な気にさせられる。いや、実際に広い世間には有り得る話だし、私の身近には居ないが、実話として父娘や母子や姉弟や兄妹などの近親姦淫は事件報道もされるし、まして義理の母子姦淫であれば、其処に子を設けるのも然程は奇異でもない印象だ。が、是が天皇家の物語で、広く国内はもとより海外にまでこの日本国の代表的な古典として知られている、ということにこそ驚愕する。日本文化の支柱としての天皇家の今日までの継続性は敬って余り有るかとは思うが、今後の天皇制を考える際に、よほど注意して日本文化の客観的な価値を実際の式典様式として後世に引き継ぐ努力と、現在の社会情勢下での国家権威の内実を不断の民主主義的合意形成で再確認し続けるとともに、後宮制度が許されない今日の公開基準を鑑みて、盲目的に天皇家の存続を以て天皇制の継続が目論めるという楽観姿勢は、この物語が今日にあっては広く一般大衆に天皇家の内実を親しく暴露しているという事態をよくよく噛み締めて、気軽に捨て去るべき時が来ている気がする。日本の伝統は現在の天皇制に体現されてはいるし、権威の象徴としての具体表象は天皇家であり皇居であり宮内庁管轄の各御所であり、明治神宮であり、あるいは全国の寺社であり、それらは確かに天皇家に連なっているようにも見える。が、実は権威実体は更に国会議事堂であり国会図書館であり最高裁判所であり国立能楽堂であり、霞ヶ関であり桜田門であり、各自治体であり、各事業者であり、地主であり家主であり管理者であり、遂には各個人であり、つまりは今日の社会そのものだ。構成者各位が真に主体的な参画意思を持って、今現在最も尊ぶべき理念を合意形成することこそが未来を切り開く。勿論、有形無形の文化遺産は大事にするべきで、皇居も皇居の住人の権威も守られるべきものの様な気がするが、その責務を今の天皇家だけに負わせたり、また誰かが個人的に背負うという設定は、歴史的にも論理的にも理念の上でも破綻している。超然とした存在なんて詭弁だ。権限と予算があってこそ個人も組織も運営存続できる。品位ある国家元首として国際交流の任を果たし、それを国内外に平易に説明できる優れた人物なら、多くの納税者の尊敬を得られるだろう。相当に高度な資格設定をして元首を互選する制度を設ければ、その任を今の天皇家に限定する理由は全く無い。勿論、皇族は有力な有資格者だが、客観評価は受けなければならない。早く権威者の尊厳を取り戻さなければ、それこそ文化の土台を失う。無闇に人を敬えと言っても始まらない。尊敬できる人物を権威の座に着けて、多くの人が素直に日常的な敬意を表せる機構の実現が望まれる。　*「口惜しくさうざうしく思せど」は何という不遜な源氏殿の魂胆であることか。臣下身分の自分の胤を義母である藤壺女御腹に植え付けて、その実の子を帝位にまで就けてしまったのみならず、その血統を正規の王家筋として子孫に継承したかった、という無頼漢ぶりだ。尤も、それが適えば完全に禁忌の罪を闇に葬れる、という切実な心理は分からないでもない。が、そういう計算こそが正に邪道の正当化そのもの

だ。それが実現するのなら、明石入道も真っ青で殆んど出る幕は無くなる。というか、もともと源氏殿の実母の桐壺更衣も明石一族の血筋だった訳だから、この明石一族の位置付けは興味深い所だ。実は蘇我氏の末裔だった、とかだと大どんでん返しだが、そんな筋を鎌足血筋が許す筈も無い。が、案外有り得る話なのかも知れない。

*春宮の女御は(皇太子の母女御となった桐壺妃は)、御子たちあまた数添ひたまひて、いとど御おぼえ並びなし(御子たちを多く儲けていらして、ますます帝の御寵愛が他の妃に比べようもなく深まります)。　*「とうぐうのにょうご」は注に＜明石女御は帝の寵愛が厚く御子たちも大勢いる。「春宮の女御」は東宮の母女御の意。帝の女御は複数いる。東宮の母女御は一人。そのほうが重々しい呼称。＞とある。大内裏は中央政府であり、其処では人びとが公人として勤めを果たしていて、勤めが終われば内裏を去って私邸で私人として生活する、というのが組織規範だ。そして、御所はその中心であり、政府の業務執行を権威付けし、国体の表象として総代たる大君がその恙無きを祈る公式の祭祀場として位置付けられる。が、同時に御所は大君の私邸でもあって、表向きにも蔵人や舎人などの大君の私用に仕える者が居り、中向きにも多くの女官や女房が仕えるが、奥向きの後宮こそは基本が大君の私邸である。が、当然にも大君の相伴者として子孫繁栄を体現する女君には公人としての役割が担わされ、その国体様式は中宮職や女院などの公式の組織立てで機関運営される。つまり、後宮の何人かの帝の妻たちは、後宮住まいをしている限りは帝の私邸に私的な許しを得て自費滞在しているが、帝が正式な妻として宣旨すると公人たる后として官費生活が保障されると同時に公式行事への出仕が義務付けられる、という仕組みになっていたようだ。で、王家血筋の皇位継承資格者の誰かが即位すると、その母君は新帝から当然の敬意を払われて皇太后の地位に宣旨されたらしい。というより実態は、それほどの権勢家を後ろ盾に持つ母君腹の皇子が立太子されたのだろう。ということは、皇位継承被指名者たる皇太子その人の母君は、よほどの事件事故がない限りは息子の即位と自身の立后が約束された立場にいる、という意味になる。穏当に考えれば、その母君は今上帝の妃なのだから、今上帝がその妃を中宮に宣旨すれば、今現在でも立后して后位に就ける筈だが、今上帝の立后には現政権の執行が絡むので、喫緊の政治情勢を収めるべく取り量られるという全くの政治人事で、実権支配に遠い名誉人事に見える皇太后のようには自動的に決まらなかったのかも知れない。ともあれ、桐壺妃は予算措置が保障される皇太后位が大いに見込める位置には居たようだ。

*源氏の(そうなると、ここ数世代にわたって源氏勢が)、うち続き后にゐたまふべきことを(重ね続けて后位に就くことになりそうな現下の推移を)、世人飽かず思へるにつけても(世の多くの藤原勢が不満に思う世情を見るにつけても)、冷泉院の后は(冷泉院の皇后という立場になった秋好中宮は)、ゆゑなくて(両親を亡くした自身には本来は入内は縁遠いのに)、あながちにかくしおきたまへる御心を思すに(よくもこうした逆境下で、あえて養女身分でこのように后位に就かせ置き下された源氏殿の御心遣いをお考えになると)、いよいよ六条院の御ことを(ますます殿の御恩を)、年月に添へて(年を重ねるほどに)、限りなく思ひきこえたまへり(限りなく尊く思い申し上げなさったのです)。　*「源氏の」は注に＜藤壺（先帝の四宮）、秋好（故前坊の姫、源氏の養女）をさす。「源氏」は皇族の意で使われている。＞とある。確かに、「源氏の」の「源氏」は六条院源氏殿を示す言い方には見えない。が、文脈からして此処の文は、この「源氏のうち続き后にゐたまふ」ところの＜藤壺、秋好＞に続いて、更に＜桐壺妃＞が「ゐたまふべきこと」を「世人(世の多くの藤原氏)」が「飽かず思へる」という文意に取るべきように思える。以前にも＜「源氏」は皇族の意で使われている＞語用はあった気はするが、源氏殿は待遇面では准太上天皇とはいえ公式の身分は臣下であり、秋好中宮は前皇太子の皇女とはいえ当時は内大臣だった源氏殿の養女格で入内したのであり、時の権中納言であった藤原殿に対する後見家の優位性を以て秋好斎宮の中宮位を正当化したのだから、「皇族の意」との指摘は疑問だ。確かに、藤壺については王家筋としてしかこの物語では説明が無いが、その王家は天智、天武、持統天皇と王位を争いながらも繋いだ創業天皇家による飛鳥時代の天領国家支配から、平城京時代に

大陸文明の律令制で国家管理体制の確立を図り、次第にその管理ポスト獲得の権力闘争に勝ち残った橘、大伴、藤原らの有力家臣団に管理権限を任せる封建方式で荘園制国家の繁栄を図ったのであり、つまりは平安期の王家は有力者に担がれて権威を保つ形を自覚したので、王家筋というだけで女御身分で藤壺が入内できた筈はなく、必ず誰かしらの有力家の後ろ盾があったに違いない。ただし、それは光源氏ではない。当時彼はまだ、無力な子供だった。ただ、藤原氏でもなかったのだろう。当時の読者の常識など分からないが、今の年表などから遠く眺めれば、当時の藤原氏に対抗していたらしいのは嵯峨源氏勢力だったようにも見える。桐壺帝に醍醐天皇を重ね、光源氏に源高明を重ねたとすれば、嵯峨源氏は醍醐源氏とは別の勢力ながら藤原氏から見れば同じ源氏勢という見方も出来るのかも知れない。少し苦しいが、藤壺も藤原勢ではない、という意味での「源氏」というのはどうだろう。それに、此処であえて藤壺中宮まで引かなくても、斎宮中宮に続いて六条院からの桐壺中宮が連続しそうな情勢、と見ても文意は成立しそうだし、強いて王家を示すなら「王氏(わうし)」などの語もありそうだし、この平安中期の世情からすると、この「源氏」は藤原氏勢力にたいする源氏勢、という語用はアリかと思ふ。そして、そのような藤原勢の圧倒的優位があるだけに、源氏殿は僅かな可能性があれば強引にでも自勢力の拡大を図っておかなければならなかったのだろう。その後、実際にもう一人の養女の藤原姫撫子を右家筆頭の当時の右大将に寝取られた時は、藤原氏左右両家が結託して源氏殿に圧力を掛けた場面があって、それはほんの少しそれらしい素振りを見せた程度の脅しだったが、源氏殿は震え上がって両家の意向に従った、という印象的な話だった。

*院の帝、思し召ししやうに(冷泉院はかねてお考えなさっていらしたように)、御幸も、所狭からで渡りたまひなどしつつ(御外遊も窮屈に格式張ることもなくお出掛けなさりなどして)、かくてしも(ともかくにも)、げにめでたくあらまほしき御ありさまなり(実に喜ばしく望み通りの御生活ぶりです)。　*「院の帝」は注に＜冷泉院の日常。上皇を「院の帝」と呼称する。＞とある。朱雀院のことも、こう呼称していた。

［第二段　六条院の女方の動静］

*姫宮の御ことは(妹宮でいらっしゃる六条院に嫁いだ姫宮のことは)、帝(兄宮である朱雀院の御子の新帝が)、御心とどめて思ひきこえたまふ(お気に掛けて御心配申しあそばします)。　*「姫宮」は注に＜女三の宮をさす。＞とある。確かに、朱雀院の女三の宮は「姫宮」と呼称されてきた。が、それは朱雀院が姫宮の嫁ぎ先を思い悩んでいたという若菜上巻一章一段からの文脈に沿って語られていた事で、今から六、七年前当時の姫宮 13,4 歳から降嫁の 15 歳の頃の話であり、此処でかの人の話題を語るなら＜六条院に嫁ぎ給ひし妹宮の＞くらいの前振りがないと、その人とは特定できない。姫宮も、もう 20 歳だ。こういう書き方は間々あるようだが、分かり難いし、その分かり難さに作者が気付かない、というのが腑に落ちない。

おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを(姫宮は朱雀院の皇女ということで今の政府高官たちからも広く尊敬されていらっしゃるが)、対の上の御勢ひには、えまさりたまはず(六条院の中にあっては、対の上の第一夫人の御権勢にはとても及びなさいません)。

年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえ交はしたまひて(対の上は源氏殿とは年を重ねるほどに御夫婦仲がとても良く親しくし合いなさって)、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬ*ものから(少しも飽きてしまうこと無く、疎遠にも見えなさらないのだけれども)、*「ものから」は大辞泉に＜［接助］《形式名詞「もの」＋格助詞「から」から》活用語の連体形に付く。＞と解説され、主に逆接の確定条件を表わして＜～けれども、～ものの＞という言い方と例示される。

「今は、かう*おほぞうの住まひならで(今はこのような漫然とした暮らし方ではなく)、のどやかに行なひをも、となむ思ふ(心静かに念仏行をして暮らしたい、とのように思います)。　*「おほぞうの住まひ」は訳文に「普通の生活」とある。が、注釈に此処の文意は＜以下「思し許してよ」まで、紫の上の詞。出家の希望を述べる。『完訳』は「このような通り一遍の暮しでなく」「ありふれた物思いがちな愛人なみの生活」と注す。＞とある。「出家」の生活を「のどやかに行なひ」と言っているのなら、「のどやか」は＜心落ち着いた＞であり、「行なひ」は＜念仏行＞だろうから、それに対比させた今の生活は＜漫然と志の無い←いいかげんな←大雑把な←おほぞうの＞＜暮らし方←住まひ＞ということか。

この世はかばかりと、見果てつる心地する*齢にもなりにけり(この世はこのようなものと見終えた気になる歳になりました)。　*「よはひ」は注に＜紫の上、三十六歳。後文の翌年の記事に「今年は三十七にぞなりたまふ」（第六章二段）とある。＞とある。が、しかし、源氏殿は本年で 46 歳のはずで、そうなると紫の上とは 10 歳違いということになってくる。確か、上は光君の 8 歳年下だった、かと思う。マ、本文、といわれているもの、に従う他は無い読者としては、軽く五、六年も話をブッ飛ばされて、ちょっとぼんやりしているので、そうだったっけ、と 10 歳違いを認めるしかない、んだろうな。

さりぬべきさまに思し許してよ(そう出来ますように私に出家をお許し下さい)」

と、まめやかに聞こえたまふ折々あるを(と真剣にお話し申しなさる時々があるのを)、

「あるまじく、つらき御ことなり(出家などあってはならない悲しい事です)。みづから、深き本意あることなれど(私自身がそれを本気で考えていますが)、*とまりてさうざうしくおぼえたまひ(後に残ってあなたが寂しくお思いになり)、ある世に変はらむ御ありさまの、うしろめたさによりこそ(私が隠棲した後の権勢の無くなったあなたの御暮らしぶりが心配で)、ながらふれ(今なお私は世俗に生きているのです)。つひにそのこと遂げなむ後に(私がいよいよ出家を遂げた後に)、ともかくも思しなれ(あなたの出家も、どうなとお考えなさい)」　*「止まる」は＜後に残る＞。敬語が無いが、条件文なので省略されているのだろう。こういう敬語省略は間々在るように思うが、意外に主語が紛らわしい。

などのみ、妨げきこえたまふ(などとばかり殿は制止申しなさいます)。

女御の君(桐壺妃は)、ただこなたを(ひたすら対の上を)、まことの御親にもてなしきこえたまひて(本当の親として接し申しなさって)、御方は隠れがの御後見にて(実母の明石御方は目立たない私的な場所でのお世話役として)、卑下しものしたまへるしもぞ(へりくだっていらっしゃるというのが無難で穏やかな身の処し方なので)、なかなか(このまま無事にさえ事が運べば、妃の后位も皇太子の即位も適うので、それが何よりも)、行く先頼もしげにめでたかりける(行く末が頼もしく喜ばしかったのです)。

尼君も、ややもすれば、堪へぬよろこびの涙(明石尼君も何かあれば溢れ出る嬉し涙)、ともすれば落ちつつ、目をさへ*拭ひただして(かと思えばまた別の事で目出度いことに涙を流して目頭を拭う日々で)、命長き、うれしげなる例になりてものしたまふ(長生きして良かったという例に成っていらっしゃいます)。　*「のごひただす」は＜拭き清める＞。目出度さの修飾語用だろうか。

［第三段　源氏、住吉に参詣］

住吉の*御願、*かつがつ果たしたまはむとて（源氏殿はこの慶事に取り急ぎ住吉神への御礼参りをなさるという際に）、春宮女御の御祈りに詣でたまはむとて（桐壺妃の皇子の立太子が叶った御祝参詣という事なので）、かの箱開けて御覧ずれば（その願文をしたためた明石入道の文箱を開けて、その文面をお読みになれば）、さまざまの*いかめしきことども多かり（御礼参りとして為すべき、さまざまな大掛かりの願解きの奉納事が多く書かれてあったのです）。　*「御願」は「ごぐぁん」ではなく「おんぐぁん」とローマ字文の読みがある。下に「かの箱」とあるから、この「御願」は明石入道が書いた願文のことらしいが、「住吉の御願」は＜住吉神への願い事＞という言い方。　*「かつがつ」は「且つ且つ」で「且つ（それに伴って）」を重ねて＜次々に急ぐ＞語感。此処では、「願果たし＝御礼参り＝祝い奉納」についてだから、「春宮女御の御祈り＝皇子の立太子の願掛け」が叶って果たされたことを「かつがつ＝取り急ぎ」住吉神に＜立太子成就の御祝参り＞に詣でる、ということらしい。「果たしたまはむ」の主語は源氏殿、と注にある。文意と敬語遣いから其と分かるのだろうが、一読した限りでは私には主語も文意もまるで分からない変な文だ。語りならそれなりに説得力があるのだろうか。　*「いかめしきことども」が何を示すのか分からない。が、下に「年ごとの春秋の神楽に、かならず長き世の祈りを加へたる願ども」を「果たしたまふべきこと」と願文に書いてあったらしいので、それが「いかめしきことども」の中の一つと思えば、住吉神に対する御礼参りの示し方を教える文面だったように思える。

年ごとの春秋の神楽に（それらの中には、毎年の春と秋の神前舞に）、かならず長き世の祈りを加へたる願ども（必ず子孫繁栄の祈りを合わせ上げて奉納するようになどとのいくつかの誓文があって）、げに、かかる御勢ひならでは（尤もなことに、このような御権勢ともなれば）、果たしたまふべきこととも思ひおきてざりけり（そうした神楽舞を住吉神に捧げなさるべき事とも明石入道は考えていたわけなのです）。

ただ走り書きたる趣きの（ただ走り書きしただけのような筆跡の文面が）、*才々しくはかばかしく（思慮深く的確で）、仏神も聞き入れたまふべき言の葉明らかなり（仏や神も願いをお聞き入れくださるように文意が明瞭です）。　*「才々し」は「かどかどし」ではなく「ざえざえし」と読みがある。どちらにしても、意味は＜才気がある＞。

「いかでさる山伏の*聖心に（どうしてあんな田舎暮らしの世間知らずに）、かかることどもを思ひよりけむ（こんな世慣れた具体的な指示が思いついたのだろう）」と、あはれに*おほけなくも御覧ず（と殿は感服し畏敬すら御覚えなさいます）。　*「聖心（ひじりごころ）」は＜徳のある考え＞みたいな言い方だろうが、此処では＜浮世離れ＝世間知らず＞の語感。　*「おほけなし」は＜（形ク）身分・年齢・能力を超えているさまである。身のほど知らずだ。おそれ多い。だいそれている。＞と大辞林にある。語感のつかめない語だ。「身のほど知らずだ」と「おそれ多い」という反対の形容を示せる語というと、今なら「とんでもない」という＜程度の大きさ＞をいう語くらいしか思い付かない。

「さるべきにて（これらの願いを実現させるべく）、しばしかりそめに身をやつしける（しばし田舎者の姿に仮身をやつしていた）、昔の世の行なひ人にやありけむ（昔の高僧の成り代わりだったのかも知れない）」など思しめぐらすに（などと入道の事を考えてみると）、いとど軽々しくも思されざりけり（殿はますます軽々しくは思えなされません）。

このたびは(しかしこの度は)、*この心をば表はしたまはず(この明石入道の願掛けに拠る明石一族としての御礼参りの形にはなさらず)、ただ、院の御物詣でにて出で立ちたまふ(源氏殿はただ六条院としての孫の立太子成就の御礼参りということで住吉大社に出発なさいます)。　*「この心」は＜明石入道が考えた御願果たしの方法＝明石一族としての満願御礼参り＞。ただ、「こ(の心)」と指示代名詞を置くほどには、いくらかの明石入道の願文の説明を上文でした後で、しかし「このたびは」それを採用しない、という書き方は女房語りの体裁のこの物語としては珍しく、地文での論理記述という語り口の印象だ。

*浦伝ひのもの騒がしかりしほど(かつて須磨から明石へ、浦伝いに慌しく移った時の)、そこらの御願ども(復権を住吉神に祈った、多くの願文は)、皆果たし尽くしたまへれども(皆叶えて復権後に御礼参りなさっていらしたが)、なほ世の中にかくおはしまして(今なお世に権勢を誇りなさって)、かかるいろいろの栄えを見たまふにつけても(こうした子孫の立太子などの繁栄を実現なさることにつけても)、神の御助けは忘れがたくて(殿は住吉神の御加護は忘れようも無く)、*対の上も具しきこえさせたまひて(対の上もお連れ申し上げなさって)、詣でさせたまふ(大社に詣であそばします)。　*「浦伝ひ」は20年前の須磨から明石へ流浪した不遇時代のこと、らしい。注には＜「浦伝ひ」は歌語。源氏の和歌にも詠まれる（明石）。＞とある。「源氏の和歌」は明石巻二章二段に「遥かにも思ひやるかな知らざりし浦より彼方(をち)に浦伝ひして(和歌13-03)」と、須磨から明石に移って直ぐの紫の上への手紙にあった贈歌で、不安な心境を伝えたもの、のようだ。　*「対の上」を住吉詣でに連れて行くことは「院の御物詣で」の体裁に適うのだろう。今は六条院の権勢を持って、春宮の後ろ盾の磐石ぶりを世に示す事が肝要だ。桐壺妃の公式の母であり、春宮の祖母格である紫の上の晴舞台でもあり、その貢献に報いたいという殿の配慮もあっただろうし、姫宮の権威に埋もれないように世の尊厳を紫の上に保つ事は政治的に必要な措置だったようにさえ見える。源氏殿は自身は臣下身分なので黙っていれば朱雀院の権威に婿として隠れざるを得ない。となると、六条院としての独立性を以て春宮を頂かなければ藤原右家勢力に飲み込まれかねない。源氏殿は藤原氏の左右の均衡を利用して上手く立ち回らなければ一気に下座に置かれる危うい立場だった。まして、明石一族の栄光は今の東宮が即位して初めて実が生るのであり、更にその子孫が帝位を襲ってこそ王家に血筋を残せる訳で、そうなってやっと源氏殿も晴れて公式に血筋を誇れるという道程だ。

響き世の常ならず(住吉詣での源氏殿ご一行の華やかさについての世間の話題ぶりは大変なものでした)。いみじくことども削ぎ捨てて(大幅に編成を簡略化して)、世の煩ひあるまじく(世間を煩わせないようにと)、と省かせたまへど(自粛なさったが)、*限りありければ(簡素と言っても院の格式として、限界があるので)、めづらかによそほしくなむ(御一行は美しく整えられていました)。　*「限りありければ」は注に＜いくら簡略にするといっても院としての格式があるので、という意。＞とある。格式、とか、儀式、という対象体の語が省かれていて、確かに分かり難い言い方だ。別に此処に限った事では無いが、この物語は注釈が無ければ本当に少しも読み進めない古文だ。

[第四段　住吉参詣の一行]

上達部も、大臣二所をおきたてまつりては、皆仕うまつりたまふ(政府高官たちも左右の大臣お二人をお除き申上げて全員が供奉なさいます)。

舞人は(まいびとは、神前で奉納舞を披露する者たちは)、*衛府の次将どもの(帝の側近である若い名門の子息たちの中から)、容貌きよげに、丈だち等しき限りを選らせたまふ(姿形が美しく

背丈が同じほどの者ばかりを殿はお選びなさいます)。この選びに入らぬをば恥に(この選に漏れたのを恥じて)、愁へ嘆きたる*好き者どもありけり(憂い嘆く芸達者たちも居ました)。　*「衛府の次将ども(ゑふのすけども)」は注に＜六衛府（左右近衛府・左右兵衛府・左右衛門府）の次官たち。東遊の舞人は十人である。＞とある。私には具体的な絵は浮かばないが、「衛府の次将ども」は武将でないのだろう。実務武官は衛士を指揮する三等官以下であり、次将までの管理官は王朝の警備にあっては即ち帝の側近であり、「次将」の年回りは「大将」ほどの中年ではなく、若い公卿の子息たちの中でも文武に優秀な者たちの抜粋で、天子に次ぐ六条院にだからこそ仕えるが、普段はそれぞれが配下を多く従えた、雲上の高官たちであったのだろう。その中でも更に「容貌きよげ」の者を選りすぐったという設定だ。　*「好き者」の「すき」は「数寄」とも当て字され＜風流者＞くらいの意味らしい。訳文には「芸熱心」とあって面白いが、むしろ＜芸好き→芸達者＞あたりでどうだろうか。

*陪従も(舞楽を奏する楽人たちも)、石清水、賀茂の*臨時の祭などに召す人びとの(石清水や賀茂の神社の特例際などに御用立てる人びとの内から)、道々のことにすぐれたる限りを整へさせたまへり(各管楽に秀でた者ばかりをお揃えなさいました)。*加はりたる二人なむ(追加された二人の楽人についても)、近衛府の名高き限りを召したりける(近衛府の名手と名高い蔵人をご指名なさったのです)。　*「陪従(べいじゅう)」は注に＜石清水の臨時の祭（三月中または下の午の日）、賀茂の臨時の祭（十一月下の酉の日）に東遊を奏する楽人（陪従）は、いずれも十二人（四位、五位、六位から各四人ずつ出る）。＞とある。いよいよ以て、此処での神前舞は「あづまあそび」というものだったらしく語られる。およその様子が知りたいものと YouTube を頼ると「御蔭祭り下鴨神社」という東遊のアップがあった。カメラアングルも良く、舞も笛も歌も見応えがあった。武官装束だった。　*「臨時の祭」は、何かの時に臨時に行なわれた祭り、ではないらしい。大辞泉には＜例祭のほかに行われる祭礼。特に、陰暦 11 月の下の酉(とり)の日に行われた賀茂神社の祭り、陰暦 3 月の中の午(うま)の日に行われた石清水八幡宮の祭り、陰暦 6 月 15 日に行われた祇園八坂神社の祭りをいう。＞とある。となると、「臨時」という現代語の＜特別な場合＞の語感とは違って来る。大例祭ではないが、それなりに意義付けられた恒例の祭りではあったようなので＜特例際＞とでも言って置く。　*「加はりたる二人」は注に＜加陪従といい、臨時に加えた楽人。＞とある。

*御神楽の方には(みかぐらのかたには、神前行列の方には)、いと多く仕うまつれり(とても大勢がお仕え申しました)。　*「御神楽の方には」という言い方に私は戸惑った。「神楽」は大辞泉に＜神をまつるために奏する舞楽。宮中の神事芸能で、先行の琴歌神宴(きんかしんえん)などに、石清水八幡(いわしみずはちまん)などの民間の神遊びを取り込み、平安時代に内侍所御神楽(ないしどころみかぐら)として完成。楽人は左右の本方(もとかた)・末方(すえかた)の座に分かれ、歌い奏し、主要部分では舞を伴う。御神楽(みかぐら)。＞とある。だから上文の東舞が神楽のことと思っていたのに、此処で改めて「御神楽の方には」と言われると、東舞と神楽との関係を考え直さなければならない。で、この「御神楽の方」としては下文に「心寄せ仕うまつる」として、その様子が「内裏、春宮、院の殿上人、方々に分かれて」「数も知らず」と説明されている。ということは、神前に詣でる行列そのものが神を表敬する奉納、という位置付けに見える。ということは、この「みかぐら」は「御神楽」というよりは「御神座」で、「かた」が「御前」を示しているような語感だ。表敬であれば、その全てが「かぐら」であって、だから失礼のないように正装で着飾るのだろうし、「東遊び」はその中の核となる祭事、という位置付けなのだろう。尤も、「かぐら」は実質では祝舞なので、特に時の権勢家にあっては、神の御加護への御礼に名を借りて、神前という晴れの舞台を得た、威厳の披露ではありそうだ。

*内裏、春宮、院の殿上人、方々に分かれて、心寄せ仕うまつる(王家の各御所からこの参詣への出仕の御役目を仰せ付かった側用人たちが、それぞれ行列を仕立ててお祝いをお示し申し上げ

ます)。数も知らず(以下に連なる従者たちは数え切れないほど多数で)、いろいろに尽くしたる(それぞれに着飾った)上達部の御馬(かんだちめのおんうま、高官がお乗りなさる御馬に)、鞍(くら、その鞍に)、馬副(うまぞひ、その口取りに)、随身(ずいじん、その護衛武官に)、*小舎人童(こどねりわらは、牛車を先導する美少年や)、次々の舎人などまで(更に続く見習い蔵人たちなどまでが)、整へ飾りたる見物(威儀を揃えた行列の見物は)、またなきさまなり(またとない華麗さでした)。　*「うち、とうぐう、ゐんのてんじゃうびと」とそれぞれの公邸に御用役人が居るという公費負担の大きさを思う。もちろん、それらが参じるほどの威光を示す描写ではあるのだろうが、御所や院が増えることに伴う運営費用の増大は気になるところだ。が、其れは単に危惧ではない。農業生産が拡大して人口が増えるという国力増大期にあっては、それに伴う管理組織の拡大も当然に図られる。拡大期に公邸が増えるのは管理実体として必然であり、その高揚する国威の象徴でもあり、目出度く、其の建設と其処での公式行事がまた消費拡大を促し、技術革新を刺激し、更なる生産性の向上が期待される、という好循環の一面も示している。多くの人の暮らし向きが向上して、名誉ある管理職の座も増えて、全体に良い時代だ。ただ、その発展性の基となる核心の技術学識には自ずから一定の限りがあって、無制限に、また同比率で、社会は拡大し続けることはない。行き詰まりと混乱は必ず起こるもので、拡大した社会は内側から崩れるというのがローマ滅亡の説明方法だったかと思うが、引いて見れば拡大というものは修正の利かない局面での崩壊を予感させる。　*「小舎人童」は注に＜「小舎人　コドネリ」（禁中方名目抄）。近衛の中将・少将が召し連れる少年。＞とある。また、古語辞典には更に加えて＜牛車の先などの立つ＞とあり、此処での描写にはまる気がする。

女御殿(桐壺女御と)、対の上は(紫の上は)、一つに奉りたり(同じ一番牛車にお乗りなさいます)。次の御車には、明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり(次の牛車には明石御方と明石尼君が人目に立たないようにお乗りになりました)。*女御の御乳母、心知りにて乗りたり(女御の御乳母が気心の知れた者として同乗しました)。方々の*ひとだまひ(各御方々のお供の車は)、上の御方の五つ(対の上付きが五台)、女御殿の五つ(桐壺女御付きが五台)、明石の御*あかれの三つ(明石御方の分が三台と)、目もあやに飾りたる装束(目にも綾なす御一行の飾り立てた衣装の)、ありさま言へばさらなり(見事さは言うまでもありません)。　*「女御の御乳母」は十八年前の桐壺妃誕生を受けて、殿が姫の教育係として明石に派遣した＜宣旨の娘＞のことだろうか。「心知りにて」とあるから、そうかも知れない気はするが特に注も無くはっきりしない。此処では敬語遣いが無いが、派遣当時は王家血筋の宣旨の娘に敬語が使われ、明石御方は受領の娘の立場に過ぎなかったので敬語が無かった。もし是が宣旨の娘なら、明石一族の成功を示す文意にも見える。　*「ひとだまひ」は古語辞典に「人給ひ」と漢字表記があり＜人々に給わること。また、その物。＞という意味で、特に＜随行者の乗る車。従者に貸し賜る牛車。「副車(そへぐるま)」とも。＞のことと説明がある。　*「あかれ」は「別れ」で＜集まっていた人々が、あちこちにわかれ散ること。散会。＞だが、別の意味に＜所属するもの。分(ぶん)。＞がある、と大辞泉に説明される。分類、ということだろうか。訳文には「御あかれ」を＜ご一族＞としてあるが、尼君付きの女房は明石御方が実際には手配したかも知れないが、尼君は東宮が即位した後に帝として祖母君を奉るまでは、源氏殿の立場で祖母君と表立って奉るべき筋合いではないので、今はまだ＜明石御方の分＞という意味に取るべきかと思う。

*さるは尼君をば(実は尼君については)、「同じくは、老の波の皺延ぶばかりに(どうせお連れ申すなら、皺が伸びるほどに面目が施せるよう)、人めかしくて詣でさせむ(豪勢な体裁にめかし立てて参詣させたらどうか)」

と、院はのたまひけれど(と源氏殿は仰ったが)、

「このたびは、かくおほかたの響きに立ち交じらむもかたはらいたし(今回はこのような院を挙げての参詣にご一緒するのも憚られます)。もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば(もし父入道の願いが適った暁には、私どもで参詣いたしましょう)」

と、御方はしづめたまひけるを(と御方は尼君を制止なさったが)、残りの命うしろめたくて(尼君は余命の短さが気懸かりで)、かつがつものゆかしがりて(気短に好奇心を抑えきれず)、慕ひ参りたまふなりけり(後に追いて参詣なさることになったのです)。*さるべきにて(というわけで尼君は)、*もとよりかく匂ひたまふ御身どもよりも(もともとこの行列の花であるべき御方々よりも)、いみじかりける契り(よほど深かろうという住吉神との縁が)、あらはに思ひ知らるる人の御ありさまなり(はっきり分かる御冥加ぶりなのでした)。　*「さるべきにて」は上文の「さるは」を受けているらしく、主語は尼君のようだ。　*「もとよりかく匂ひたまふ御身ども」は注に＜紫の上、明石の女御、明石の君をさす。＞とある。この文は全体に浮かれ口調というか、講談よりは落語調。

[第五段　住吉社頭の東遊び]

十月中の十日なれば(じふぐぁちなかのとをかなれば、住吉参詣は十月二十日のことなので)、*神の斎垣にはふ(かみのいがきにはふ、社の玉垣に這い絡まる)葛も色変はりて(くずもいろかはりて、葛の葉や蔓も色が褪せて)、*松の下紅葉など(まつのしたもみぢなど、境内の松も内側の葉から冬枯れ仕掛かって来ていて)、*音にのみ秋を聞かぬ顔なり(目にもはっきりと季節の変化が現れていて、風の音だけに秋を知るという趣ではありません)。　*「神の斎垣に這ふ葛も色変はりて」という言い回しについては、注に＜明融臨模本に合点と付箋「ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすもみちしにけり」（古今集秋下、二六二、紀貫之）とある。＞とある。「明融臨模本」は渋谷教授の概説にも記されているようだが、現在の「源氏物語」と認識されているものの基は鎌倉時代初期の歌人である藤原定家による写本だということが、周辺資料の由緒などから定説とされているものの、実物として定家自筆本とされるものの現存帖数は少なく、その中でも最も自筆が確からしいと目されているものの体裁を忠実に模した写本(臨模本りんもほん)が、定家の子孫に当たる冷泉明融(れいぜいみょうゆう)が書き写したものと目されて、底本の一つと広く考えられている、ということらしい。「合点」は大辞泉に＜和歌・連歌・俳諧などを批評して、そのよいと思うものの肩につける「○」「・」などの印。また、その印をつけること。＞、「付箋」は＜疑問や注意すべき事柄などを書いてはりつける小さな紙片。また、目印にはる紙。付け紙。不審紙。＞とあり、つまりは「明融臨模本に合点と付箋」との注の意味するところは、古写本に於ける注記のこと、のようで、この示された引歌が此処の言い回しの下敷きだ、という解説らしい。引歌は出典参照に「千早振る神の忌垣に這ふ葛も秋にはあへず移ろひにけり」と漢字変換での表記がある。「千早振る」は「神」に掛かる枕詞と古語辞典にあり＜物凄い速さの＝人智を超えた神業の＝畏れ多い＞という語感。「神の忌垣」は＜上の玉垣＝御所＞との掛詞で、「這ふ葛」は＜祭り仕える女官＝高貴な恋人＞なのだろう。「秋にはあへず」は＜飽き(空く、会えない)には敢え無く＞の語感で＜時の移ろいには逆らえず＞を暗意する。「移ろひにけり」は＜気が変わった＝熱が冷めた＞。ざっと＜憧れた高貴な女も脈が無いかと諦めた＞みたいな、振られたとも振ったとも取れそうな歌だが、深刻な失恋の趣は無い。「古今和歌集の部屋」サイトにはこの歌を、254 番の「ちはやぶる　神なび山の　もみぢ葉に　思ひはかけじ　うつろふものを」(読人知らず)に呼応しているような趣、と和歌集の編集構成に感想を記してある。　*「松の下紅葉」は注に＜『集成』は「松の下葉の紅葉。「下紅葉」は歌語」と注す。『完訳』は「下紅葉するをば知らで松の木の上の緑を頼みけるかな」（拾遺集恋三、八四四、読人しらず）を指摘。＞とある。心変わりを疑わず、信じた私が馬鹿だった、みたいな歌謡曲。　*「音にのみ秋を聞かぬ」は＜明融臨模本は合点と付箋「もみちせぬときはの山は吹風のをとにや秋をきゝわたるらん」（古今集秋下、二五一、紀淑

望）とある。＞と注にある。出典参照には「紅葉せぬ常盤の山は吹く風の音にや秋を聞きわたるらむ」とあり、歌筋は＜秋になっても紅葉しないスギやヒノキの常緑樹林が植えられた山は気圧の変化で強くなった風の音で秋の深まりを聞き知るのだろうか＞で、歌意は＜外見では分からない夫の心変わりを風の噂に聞かされる＞で、「常盤の山」が男か女か分からないし、是も振ったのか振られたのか分からない。ただ、「飽き」の語感は、確かに修復の利かない心離れではありそうだが、ある種純粋な感情で、恨み辛みの込もった重い関係性とは違う印象だ。とはいえ、その場限りの遊びとも違うようだが、引けて行く「秋」の無常感の所為か、その色合いに染まった「飽き」という語は＜飽きらむ＝諦め＞が付き易い。

ことことしき高麗、唐土の楽よりも（大編成の半島や大陸の音曲よりも）、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく（民謡の素朴さが残る東遊びの聞き慣れた調べは親しみがあって風情豊かで）、*波風の声に響きあひて（淀川河口を吹き渡る風の音に響き合って）、さる木高き松風に吹き立てたる笛の音も（さる十七年前のすれ違いを思い出させるように、今日もまたこの住吉浜の松原に楽人が吹きたてる笛の音も）、ほかにて聞く調べには変はりて身にしみ（他で聞く調べとは違って身に染みて）、御琴に打ち合はせたる拍子も（和琴の菅掻きで取る拍子も）、鼓を離れて調へとりたるかた（鼓に合わせるのとは違って）、おどろおどろしからぬも（柔らかい間合いで鳴り合うのも）、なまめかしくすごうおもしろく（公式行事とは違う格式張らない情緒が趣き深く殊更に印象的で）、所からは、まして聞こえけり（神前という場所柄の所為で、ますます厳かに聞こえました）。　*「波風の声に響きあひて」の言い回しに、私は澪標巻四章二段の十七年前の晩秋だろう住吉浜でのすれ違いで、明石御方が時の29歳の内大臣たる光君御一行の権勢に圧されて、その日の参詣を諦めて翌日に改めることにした際の＜「今日は難波に舟さし止めて（今日のところは、淀川河口の浪速社の方へ舟を向けて留まり）、祓へをだにせむ（お清め神事の御祓いだけでも致しましょう）」とて、漕ぎ渡りぬ（ということで住吉前を漕ぎ去りました）。＞という場面が印象深く思い出される。で、「さる木高き松風」の「さる」も往時の描写の＜「松原の深緑なるに花紅葉をこき散らしたると見ゆる表の衣の濃き薄き数知らず。」（澪標巻四章二段）＞という難波津から見た住吉浜の賑わいを、読者に被せ読ませようとする作者の意図を感じる。で、そう読む。

*山藍に摺れる竹の節は（舞人の着る衣装の青摺りの竹の絵柄は）、松の緑に見えまがひ（周囲の松の緑に溶け合って）、插頭の色々は（冠に挿した飾り物の造花の色々は）、秋の草に異なるけぢめ分かれで（秋の草と区別が付かず）、何ごとにも目のみまがひ*いろふ（どんな舞振りにも目移りして飽きません）。　*「やまあゐ」は＜トウダイグサ科の多年草。山中の林内に生える。茎は四稜あり、高さ約40cm。葉は対生し、卵状長楕円形。雌雄異株。春から夏、葉腋（ようえき）に長い花穂をつける。古くは葉を藍染めの染料とした。＞と大辞林にある。と言っても幾つかのWebサイトを参照すると、「山藍」自体は珍しい山草というほどのものでもなく、目立たないが広く山野に自生する地下茎草らしい。写真で見ただけの印象では、日向で元気に育ち過ぎた青ジソみたいだ。さて、注には「山藍に摺れる竹の節」を＜東遊の舞人の衣裳。山藍で摺った竹の葉も紋様の衣裳を着る。＞としてある。また与謝野訳文には、「伶人の着けた小忌衣（れいじんのつけたをみごろも、伴奏者の着た衣装）」の柄模様が＜竹の絵＞だった、としてある。で、「竹の節」の「節」は「竹」の縁語使いの洒落で＜柄模様＞という言い方らしいが、「竹」は枝も葉も「緑」なので、「松の緑に見えまがひ」とある竹の絵柄は枝葉の両方、というか竹林だったのかも知れない。ところで「緑」だが、是は今の日本語でも「緑」と「青」の両方を示す語で、当時の「山藍に摺れる」ものの色合いが「緑」だったのか「青」だったのか判然としない。というのも、竹も松も実際に青くも緑にも見える時があるし、今は廃れたとされる古代染めの「山藍摺り染め」の色合いの方も「緑」も「青」も有り得るという紛らわしさ、らしいのだ。この染色について、最も興味深かったWebサイトは「萬葉のヤマアイ染め」と題されたページ（http://www.juno.dti.ne.jp/~skknari/yama-ai-senshoku.htm）で、中略すれば、山藍の生葉からは「緑」

の摺り汁、乾燥茎からは「青」の摺り汁、がそれぞれ得られて銅媒染で布に固着できた、というものだった。ということは、この染色法が廃れたのは、山藍の色合いに難が有ったのではなく、とはいえ褪色等に難が無かったとも言い切れないが、先ずは銅媒染が難しく、広く染色法が普及しなかったことに有った、という推論も成り立ちそうだ。例えば、奄美の泥染めは、その土地の泥に酸化鉄が多く含まれていて、藍を鉄媒染しているらしいので、この山藍摺りも、何処かで一時的に酸化銅を含む泥染めが有効だったとか、しかし銅の毒が嫌われた、とか空想してみた。何れ今となってはその染色方法は無いものの、色合いとしては青ねず色が山藍摺という言い方をされているようで、取り合えずはその辺の色を思い描いて置く。　*「いろふ」は＜目移りする＞と古語辞典にある。「まがふ」は＜見間違う、入り乱れる＞だが、この「紛ひ彩ふ」は＜目まぐるしく変わる→飽きない＞という語感、かと思う。

「*求子」果つる末に(求子が歌い終わる東遊びの終盤に)、若やかなる上達部は(長官幹部級の若い貴公子たちは)、肩ぬぎて下りたまふ(上着の肩を脱いで庭へ降りて舞人に加わりなさいます)。　*「求子(もとめご)」は＜東(あずま)遊びの曲名。また、それに合わせる舞。求子歌。＞と大辞林にある。で、改めて「東遊」を調べると、この説明は Wikipedia に詳しかった。当該ページに拠ると、概略は「東遊（あずまあそび）は、雅楽の国風歌舞に類される長大な組曲である。演奏時間に 30 分程度を要する、かなり長い組曲であり、東国起源の風俗歌にあわせて舞う。舞人は 6 人あるいは 4 人、歌方は拍子、和琴、琴持、東遊笛（中管）、篳篥、付歌で奏する。(中略)。 駿河舞と求子歌の 2 曲舞うことを「諸舞」、駿河舞のみを舞う形式を「片舞」と呼称する。」と記され、その組曲は「一歌、二歌、駿河歌、求子歌および加太於呂之（大広歌とも）の 5 曲であるといわれ」、その順序で演じられるらしい。ざっと、天女を迎える祝歌、とは即ち豊作祈願や豊作御礼の目出度さに色情を開放して子造りを扇動するハジケタ内容らしい。で、「駿河舞」で好い女を登場させて場を盛り上げた後に、終盤の「求子」はほぼ扇情春歌で、それに呼応した貴公子たちが片肌脱いで舞いに加わる、という卑猥の極地を優雅に演出したのが、この文らしい。と、まぁ何とか此処の文意に触れたが、事程左様にこの段の描写は、当時の人々が常識とする当時の現代風俗を、当時の現代語で生き生きと平易に表現している数行なのだろうが、その風俗風情や具体事象が今に伝わっていないので、一つ一つの単語からして意味が分からない。そして、こうして多くの行を費やして注釈の助けを借りては単語の意味をどうにか探って、それらしい絵を、その一部分でも思い描いたとしても、当時の生活感まではとても分からない。ほんの百年ほど前の落語が今や全く通じないという時代の変化にあって、千年以上も前の話はさすがに手強い。それも、その話が今に繋がる言葉として何とかそれなりには読めるだけに、それが理解出来ないもどかしさは一層募る。宇宙は多分、変化の中で実在している。失うべくして失われる事象は数限りなく、新しい局面が絶えず生まれるものなのだろう。しかし、よく言われることだが、失うには惜しいもの、忘れてはいけないもの、が人間の歴史の中には絶対に在るような気は、やはりする。そしてそれは宗教教条などではなく、此処に描かれているような風俗に寄せる価値感、およびそれを形作っている技術技法、といったものの社会的な継承、とは即ち先祖への敬意と現在を生きる各人の自負を生活感として持てる暮らし、ができる社会制度の実現を図る事にありそうだ。が、それは決して、単に古いものを残せば良いという話ではない。技術革新も競争も尊い。社会構造も変化する。第一、有限世界で生き残る事は生易しい話ではない。それでも人が、先人が胸を震わせて生きて来た事を懐かしく思えなかったら、未来へ繋ぐ情熱も色褪せる。今が輝かない。いや、輝いている人生など多くはないのかも知れないが、輝きたいと思えなかったら人は、特に若者は悲しすぎる。老人は若者のために、若者は子供のために、子供は未来のために、生きるべきだ、多分。老人は尊敬さえされれば、それと出来れば空腹と寒さが凌げれば、いつ死んでも良い。そういう社会を実現すべきだ。人は少しでも役に立てば十分に生きる価値がある。が、少しも役に立たなければ生きる価値はない。但し、それは社会原理で生物原理ではないので、より深い真理を秘めた個的存在に関わる次元での生死は別にして、社会制度として必要なのは生活保障ではなく、少しでも社会貢献した人への敬意が示される組織構造の構築だ。技能集団が特権化しないように資格設定を不断に見直せば、組織

が自立化して良好な社会制度が期待できるはずだ。問題の核は複雑でも難しくもない。不断の努力があれば利害が複雑に絡み合うこともなければ、制度変更に特別な決意が必要になることもない。利権集団を放置して機構が複雑に巨大化することこそが何時でも困難な事態をもたらす。不断の見直しが自動的に行なわれる制度設計は必須だ。ただし、その統治の自動化自体が強権化しないような仕組みを担保する科学技術が暗号の量子化だけではあまりにも薄っぺらい。管理権力と職能集団との相互監視および相互補完が、社会構造の変化を正しく反映した形で機能できるかどうかは、革新的な技術学識に支えられる所は大きいだろうが、やはり生活者各位の日頃の責任ある意識と行動によってしか実現されないのだろう。

匂ひもなく黒き*袍に(畏まった正装の、色気も無くて黒い上着姿から)、*蘇芳襲の、*葡萄染の袖を(赤茶の内着の重ね着に赤紫の袖を)、にはかに引きほころばしたるに(急に引き表した所に)、紅深き*袒の袂の(真紅の下着の袂が)、うちしぐれたるにけしきばかり濡れたる(時雨のにわか雨に少し濡れた風情は)、松原をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる(舞人の松原衣装を褪色させて紅葉の散る初冬の情緒を色濃く印象付けます)。　*「袍」は「はう」ではなく「うへのきぬ」とローマ字読みがある。注には＜四位以上の黒の袍。平安中期の服飾の色を反映する。＞とある。束帯礼装での上着。　*「蘇芳襲(すはうがさね)」は四季を通じて祝儀用の重ね内着だったらしい。ざっと、赤茶系統らしい。　*「葡萄染(えびぞめ)」は漢字表記の通りのブドウ色、赤紫。是を「エビゾメ」というのはヤマブドウの古名が「エビカヅラ」と言ったことに拠るものらしく、「赤紫」を言う色名の「エビ」の方が先で、海のエビはその色が「葡萄」に似ているから「エビ」と命名された、とか言う説明もあるが、では「海老」の古名は＜カニ＞だったのだろうか。その辺は怪しいし、「えび」という語自体の由来も不明で、今では「エビ」は日常的に海のエビを指すことが多いから、変な語感だ。　*「袒(あこめ)」は下着と内着の間に着る着物で外から見える範囲で言う＜下着＞のようなもの、らしい。

見るかひ多かる姿どもに(貴公子たちは見映えの良い姿で)、いと白く枯れたる荻を、高やかにかざして(とても白い枯れススキを高く冠に挿して)、ただ一返り舞ひて入りぬるは(ただ一踊り舞っただけで牛車に引っ込んでしまったのは)、いとおもしろく飽かずぞありける(実に楽しくもっと見たい光景なのでした)。

[第六段　源氏、往時を回想]

大殿、昔のこと思し出でられ(源氏殿はこの東遊びの様子に十八年前の住吉詣での時のことが思い出されなさって)、中ごろ沈みたまひし世のありさまも(その時の中央復帰の実現が願解きとなった須磨から明石へ流浪した日々の事も)、目の前のやうに思さるるに(昨日の事のように思えなさるが)、その世のこと、うち乱れ語りたまふべき人もなければ(その不遇時代の事を飾らずに語り合えなさる相手もいないので)、致仕の大臣をぞ(須磨の閑居まで訪ねて来て下さった藤原殿を)、恋しく思ひきこえたまひける(懐かしく思い申しなさいました)。

入りたまひて(舞を見終えて牛車にお入りなさると)、二の車に忍びて(二の車に目立たぬように)、

「誰れかまた心を知りて住吉の神代を経たる松にこと問ふ」(和歌 35-02)

「住吉浜の松原に人知れず思うありがたさ」(意訳 35-02)

*注に＜源氏の贈歌。「神代を経る」は遠い昔の意。「松」は尼君をさす。＞とある。「松」は尼君をさす、ということは、そうであれば「こと問ふ」が＜人に尋ねる＞と＜神に願う＞の洒落言葉になる、ということは分かるが、「松」が＜常緑で長寿の象徴＞だから「尼君をさす」という一般的な解釈なのか、他に何か下敷きが在っての「松＝尼君」の語用なのか、が分からない。と言っても、それらしい下敷きは思い付かないので一般語用としての掛詞かと思っても、それにしては、上文では明石ではなく須磨での藤原殿との回想をしていて、尼君を引く思わせぶりな前振りも無く、ただ「二の車に忍びて」の一言だけで差出先の＜尼君＝松＞とする一般語用は、少なからず唐突だ。かと言って、住吉神を長く信奉している明石一族だから「住吉の神代を経たる松」が＜尼君への呼び掛け＞になって、それが住吉浜の松原に鎮座する＜住吉神＞との複意になる、という理屈は分かる気がするが、それでは理屈が立ちすぎて歌の情緒が無い。だから、「住吉の神代を経たる」という言い回しに「住吉」が「神、神代」の枕で、歌の音として独特の厳かさがあった、と思う以外に、この歌の味わいが有る、とは私には思えない。

御畳紙に書きたまへり（という歌を懐紙に書き送りなさいました）。尼君うちしほたる（事情を知る尼君は感涙にむせびます）。

かかる世を見るにつけても（このような一族の繁栄を見る今の時世を見るにつけても）、かの浦にて、今はと別れたまひしほど（あの明石の浜で、一先ずは殿が上京なさるということで別れた時の残された娘の先行きの不安さや）、女御の君のおはせしありさまなど思ひ出づるも（桐壺妃が三歳の暮れに二条院に移るまで手許でお育ち為さった様子などをが思い出されるのも）、いとかたじけなかりける身の宿世のほどを思ふ（本当に有難いこの身の源氏殿との縁の深さを尼君は思います）。世を背きたまひし人も恋しく（出家なさった夫の入道殿も恋しく）、さまざまにもの悲しきを（様々に感極まるのを）、かつはゆゆしと*言忌して（それもこの晴れの場に相応しくないと嘆き言葉を避けるように注意して）、 *「ことい み」は＜不吉なことを言うのを忌み避けること＞と古語辞典にある。晴れの日に苦節の嘆き節は興醒めなのだろう。

「住の江をいけるかひある渚とは年経る尼も今日や知るらむ」（和歌 35-03）

「頼り甲斐のある住の江と年季のアマも今日知りました」（意訳 35-03）

*注に＜尼君の返歌。「貝」と「効」、「尼」と「海人」の掛詞。＞とある。「貝」と「効」、「尼」と「海人」の掛詞、はこの物語中や引歌などでも海つながりの歌詠みで多用されるベタな語用だが、それだけに上手くこなれて纏まっていて、収まり過ぎるほどにお手本のように良く出来た歌の印象だ。

遅くは便なからむと（こういう場の詠み歌は返歌が遅れては興醒めだろと）、ただうち思ひけるままなりけり（深く思案もせず、ただ心に思い浮かんだままの歌でした。そして内心では、）。

「昔こそまづ忘られね住吉の神のしるしを見るにつけても」（和歌 35-04）

「入道の先見の明を思い知る」（意訳 35-04）

*注に＜尼君の独詠歌。＞とある。贈歌の「松－待つ－まつ」を「まづ」に持って来たからこその、「昔こそ」なのだろう。

と独りごちけり（としみじみ独詠したのです）。

[第七段　終夜、神楽を奏す]

夜一夜遊び明かしたまふ(御一行は一晩中神前での演奏で夜を明かしなさいます)。

*二十日の月はるかに澄みて(遅く出る二十日月夜が遠くまで明るくて)、海の面おもしろく見えわたるに(海面が美しく見晴らせる浜辺の景色に)、霜のいとこちたく置きて(朝霜が大分厚く降りて)、松原も色まがひて(松原も白く光って)、よろづのことそぞろ寒く(全体に寒さが進んだ冬の風情で)、おもしろさもあはれさも立ち添ひたり(この晴れの日の情感の深さも世情の厳しさを乗り越えた山と谷の対比で際立って感じられます)。　*「はつかのつき」は注＜十月二十日の月。月の出は午後十時ころ。＞とある。ざっと 20/30 月だから、そこそこ明るい月夜で、日没後の午後六時から九時くらいまでの空が真っ暗で、その後の十時くらいから明るくなる、というのは今でも都会でもネオン街を離れれば出会える、ちょっとお得感のある風情だったりする。

対の上、常の垣根のうちながら(対の上はいつも邸内でのことながら)、時々につけてこそ、興ある朝夕の遊びに、耳古り目馴れたまひけれ(季節感のある朝夕の庭の景色に歌詠みで先人の思いに触れ自らも感じ入りなさっていらしたが)、御門より外の物見、をさをさしたまはず(六条院の外に花見に出かけるなど少しも為さらず)、ましてかく都のほかのありきは、まだ慣らひたまはねば(ましてこのように都の外へのお出掛けなどは今まで為さったことが無かったので)、珍しくをかしく思さる(物珍しく面白くお思いになります)。

「住の江の松に夜深く置く霜は神の掛けたる木綿鬘かも」(和歌 35-05)

「住の江の松に神降りる」(意訳 35-05)

*注に＜紫の上の和歌。住吉の神の神慮をうたう。「住の江」は歌語。「霜」を「木綿鬘」に見立てる。＞とある。「木綿鬘(ゆふかづら)」は＜木綿(ゆう)で作ったかずら。物忌みのしるしとして神事に用いた。＞と大辞林にある。「ゆふ」は＜楮(こうぞ)の皮をはいで、その繊維を蒸して水に浸し、裂いて糸としたもの。幣(ぬさ)に用い、神事の際に榊(さかき)にかけて垂らす。＞とある。ざっと、サラシ手拭いを頭に被った形、だろうか。霜で白く光る松原を神事に因んだ木綿鬘に例える、というのは絵として分かり易いが、その分かり易さも言葉遣いの素直さも人柄といえばそうなのかも知れないが、あまりにも平易で、私などがこう言うのも何だが、小学生の歌みたいな印象だ。が、それは「木綿鬘」以外の語が珍しいほど現代語に続いている語ばかりの所為だろうか、言い換え無効気味。

*篁の朝臣の(昔の高名な文官である小野篁が)、「*比良の山さへ(比良山までが綿帽子)」と言ひける雪の朝を思しやれば(と詠んだ雪の朝の冬景色を思い遣りなされば)、祭の心うけたまふしるしにやと(この日の情景も住吉神が奉納舞をお認め下さった記しに違いないと)、いよいよ頼もしくなむ(いよいよ六条院の御家運が頼もしくなります)。　*「篁の朝臣(たかむらのあそん)」は注に＜小野篁（八〇二～八五二）。漢詩と和歌両面にすぐれた平安前期の文人。＞とある。　*「比良の山さへ」については、注に＜「ひもろぎは神の心にうけつらし比良の山さへゆふかづらせり」（河海抄所引、出典未詳）。なお『河海抄』は「文時卿歌也」と注記する。『花鳥余情』は「名違へか」ともいう。作者紫式部の記憶違いかまた別伝があったか。＞とある。「文時卿」は菅原文時(899～981 年、従三位・非参議、菅原道真の孫[Wikipedia 菅原氏])のことだろうか。菅原道真(845～903 年)でさえ小野篁の子か孫の世代で、どういう繋がりなのか私にはさっぱり分からない。ただ、この物語の作者とされる紫式部の父である藤原為時(950～1020 年頃)は同じ文人である菅原文時を見知って

いたかも知れず、であればこの執筆時に最も確からしいのは作者の認識だから「別伝」によって引歌が小野篁の作だった、ということでも私には特に問題は無い。「ひもろぎ」は＜神に供え奉る物。肉・米・餅など。＞と古語辞典にある。「うけつ」は、「受く（受け入れる、認める）」の連用形に完了の助動詞「つ」が付いた＜認められた、受け入れられた＞という言い方、なのだろう。「らし」は推量の助動詞。「比良の山」は琵琶湖西側の蓬莱山付近。冬の叡山への参拝だろうか。遠くの雪山なら如何にも綿帽子だ。

女御の君（桐壺女御）、

「神人の手に取りもたる榊葉に木綿かけ添ふる深き夜の霜」（和歌 35-06）

「榊葉に霜が降りるほど張り詰めた朝の儀式です」（意訳 35-06）

*注に＜明石女御の紫の上の和歌への唱和歌。「神」「木綿」「霜」を詠み込む。＞とある。神棚は白木の社や御酒瓶や米塩皿などは良く出来ていても作り物の印象だが、榊立てに榊葉が飾られると外見では御神札の有無よりもそれらしく見えたりする。その「榊葉に木綿かけ添ふる」と如何にも祀り事らしい畏怖が出る。「神人（かみびと）」は＜神に仕える人。神主。神官。＞と古語辞典にある。歌意は紫の上の歌と同じで如何にも唱和歌だが、実際の朝の神前儀式をそのまま詠んだもの、と思った方がカメラ・ルポ風の臨場感が味わえる。

*中務の君、　*「中務の君」は注に＜紫の上づきの女房。もと左大臣家の葵の上の女房だが、源氏の召人でもあった（帚木・末摘花）。主人葵の上の死後、源氏の女房となり二条院に移り、須磨退去にあたり紫の上の女房となる（須磨）。＞とある。葵上付きの「中務」がこの「中務君」と同一人物かどうかは興味深い。仮に同一だとすれば、この人の視点で相当に面白い話が聞けそうだ。が、今は主な女房の一人とだけに思って置く。

「祝子が木綿うちまがひ置く霜はげにいちじるき神のしるしか」（和歌 35-07）

「巫女も思わず真似て置く白い心を神前に」（意訳 35-07）

*注に＜中務君の紫の上の和歌への唱和歌。「木綿」「霜」「神」を詠み込む。＞とある。「祝子（はふりこ）」は＜《罪やけがれを放（はふ）り清める意》神社に属して神に仕える職の一。ふつう神主・禰宜（ねぎ）より下級の神職をいう。＞と大辞泉にある。古語辞典には＜祝り者。巫女。＞ともある。同じ神職のことらしいが、桐壺女御が「神人」と詠んだことに対する遠慮で格下の「祝子」を持ち出した、といったところか。だから、この「まがふ」は巫女が神主を＜真似る＞で、歌の中でも下位者が上位者に習うという趣きの歌筋で、是は女房が女御に歌意を唱和する歌詠みの作法の見本、という味わいなのだろう。

次々数知らず多かりけるを（以下次々と唱和歌が数知れず多く詠まれたが）、*何せむにかは聞きおかむ（その全てを聞き置いても特に役立つということもありません）。　*「何せむ」は＜何かに役立てる＞。尤も、「何せむにかは～」で＜～しても無駄だ＞という成句なのだろう。「聞き置く」は＜聞き覚えて置く＞ともあるが＜聞いて書き置いて置く＞方が資料の信頼性は高い。

かかるをりふしの歌は（こうした祝儀事での歌は）、例の上手めきたまふ男たちも（普段歌詠みに優れていそうな男たちも）、なかなか出で消えして（かえって型にはまった目立たない出来ばかりで）、*松の千歳より離れて（松の千歳という決まり文句を離れて）、今めかしきことなければ（新

味のある歌が無かったので)、うるさくてなむ(これ以上の列挙は、無用かと)。　*「松の千歳」という言い回しの文意は、注に＜『集成』は「「松の千歳」といった決り文句以外に目新しい趣向の歌もないので」と注す。＞とある。従う。ただ是は、如何にも源氏殿が尼君に歌い贈った「誰れかまた心を知りて住吉の神代を経たる松にこと問ふ」(和歌 35-02)の「松」詠みを揶揄した気分がある語り口調に思えて、「和歌 35-02」に私が覚えた些かの不満に作者が配慮した、と私は勝手に納得する。

[第八段　明石一族の幸い]

ほのぼのと明けゆくに(夜がほのぼのと明けて行くほどに)、霜はいよいよ深くて(霜はいよいよ白く光って)、*本末もたどたどしきまで(本と末の区別も曖昧なほど)、酔ひ過ぎにたる神楽おもてどもの(酔い過ぎてしまった楽人の面々が)、おのが顔をば知らで(自分たちの正体を無くした締まりの無い顔にも気付かずに)、おもしろきことに心はしみて(この祝宴の面白さに浸り切って)、*庭燎も影しめりたるに(篝火も消えかかり演舞も終わろうという時に)、なほ(まだ)、「*万歳、万歳(まんざい、まんざい)」と(と千歳の法の歌を繰返して)、*榊葉を取り返しつつ(仕舞いの標の榊葉を舞人が持ち去ろうとすると、別の舞人がそれを取り戻してはいつまでも終わらずに)、祝ひきこゆる御世の末(六条院をお祝い申し上げる子孫繁栄を)、思ひやるぞいとどしきや(思えばますますお目出度いこと)。　*「本末(もとすゑ)もたどたどしきまで」は注に＜神楽を歌う本方と末方とが混乱するほどまでの意。＞とある。「本方(もとかた)」は＜宮廷の御神楽(みかぐら)のとき、二組に分かれた歌い手のうち、先に歌いはじめる方。神殿に向かって左側に位置する。＞、「末方(すゑかた)」は＜宮廷の御神楽(みかぐら)のとき、二組に分かれた歌い手のうち、あとに歌いはじめる側。神殿に向かって右側に位置する。＞、と大辞泉にある。殆んど分からないが、本と末で交互に歌うらしい。当然に楽人は本も末も分かった上で役割分担しているものの、酔いが回ってその区別が付かずに各人が思い思いに歌っていた、ということらしい。　*「庭燎(にはび)」は大辞泉に＜庭でたく火。特に、神事の庭にたくかがり火。また、宮中の御神楽(みかぐら)でたくかがり火。柴灯(さいとう)。《季 冬》＞とあり、また＜宮中の御神楽の一曲で、楽器の調子合わせに続いて行う一種の序曲。歌は採り物の葛(かずら)の歌。＞ともあり、「影しめりたる」は＜篝火が消え掛かる＞と＜神楽が終わりかかる＞との洒落言葉語用なのだろう。　*「万歳万歳」は注に＜神楽「千歳法」の歌詞の一部。＞とある。末永い繁栄を祈る祝歌らしい。　*「榊葉を取り返しつつ」は＜『完訳』は「神楽は舞人が榊葉を持ち去ると終るが、終りそうで終らない」と注す。＞と注にある。

よろづのこと飽かずおもしろきままに(全てがいつまでも面白いままに)、千夜を一夜になさまほしき夜の(千夜ほども続いて欲しいこの夜が)、何にもあらで明けぬれば(あっけなく明けてしまえば)、返る波にきほふも口惜しく(返る波を競うのも名残惜しいと)、若き人びと思ふ(若い人びとは思います)。

松原に、はるばると立て続けたる御車どもの(松原にはるばると連続して駐められた御車の列の)、風にうちなびく(風にはためく)下簾の隙々も(したすだれのひまひまも、簾の裾の隙間隙間から覗く女房衣装も)、常磐の蔭に(ときはのかげに、常緑松を背にして)、花の錦を引き加へたると見ゆるに(花の錦を並べ添えたように見えるところに)、*袍の色々けぢめおきて(上着の色で身分の高さをはっきり示して)、をかしき*懸盤取り続きて(美しい御膳を取り次いで)、もの参りわたすをぞ(五位六位の蔵人たちが御食事を運び申し上げるのを)、下人などは目につきて(更に下位の従者たちなどは目に付いて)、めでたしとは思へる(華やかに思いました)。　*「袍の色々け

ぢめおきて」については、注に＜袍衣の色。令制では、一位深紫、二位・三位浅紫、四位深緋、五位浅緋、六位深緑、七位浅緑、八位深縹、初位浅縹。ただし、一条天皇のころから、四位以上は黒袍。前に「匂ひもなく黒き袍に」（第二章五段）とあった。この住吉詣でには四位以上は黒袍で供奉していた。＞とある。「色々」とあるから四位以上の高官ではなく、また「下人などは目につきて」とあるから、殿上人のようで、となると、五位六位の蔵人あたりが御方々に給仕したのだろう。　*「懸盤（かけばん）」は＜脚付き御膳、台付き御盆＞らしい。

尼君の御前にも（二の車の尼君の御席にも）、*浅香の折敷に（浅香木製のお盆に）、青鈍の表折りて（青ねずの布巾を敷いて）、精進物を参るとて（精進料理を差し上げるという事で）、「めざましき女の宿世かな（驚くべき女としての強運ぶりだ）」と、*おのがじしはしりうごちけり（と多くの人びとが口々に陰口を言い合いました）。　*「浅香（せんかう）」は＜香木の一種。沈香（ちんかう）に似ているが質があらく、水に入れると沈みも浮かびもせず、水面と平らになる。＞と古語辞典にある。「折敷（をしき）」は折り板で縁を接着加工したお盆。「青鈍の表折り（あをにびのおもてをり）」は＜尼君は出家者なので、浅香の折敷に青鈍色の絹を折り畳んで敷いた上に精進料理が特別に用意された。＞と注にある。　*「おのがじし」は＜おのおのめいめいに＞という言い方で、「おのおの」は＜多くの人びと＞だ。「しりうごつ」は「後言つ」で＜陰口を言う＞と古語辞典にある。

詣でたまひし道は（お参りに向かう道中は）、ことことしくて（準備も大変で）、わづらはしき（多くの）神宝（かんだから、御供物で）、さまざまに所狭げなりしを（場所も気持ちもゆとりが無かったが）、帰さはよろづの逍遥を尽くしたまふ（帰り道はいろいろと名所見物を多く為さいます）。言ひ続くるもうるさく（その豪勢さは推して知るべしですが、言い続けても同じ事で）、むつかしきことどもなれば（特に意味ある事柄もありませんので）。

かかる御ありさまをも（こうした明石一族の御隆盛の様子も）、かの入道の（その大元の入道が手紙も通わない入山生活で）、聞かず見ぬ世にかけ離れ*たうべるのみなむ、飽かざりける（見聞きもできずに世にかけ離れなさっていらっしゃる一方なのが、残念なことでした）。*難きことなりかし（この入道の超然生活は簡単に出来るものではないでしょう）、交じらはましも見苦しくや（普通の役人生活に安穏としているのも見苦しいほどの厳しさです）。　*「たうべる」は「給へる」の音便。　*「難きことなりかし。交じらはましも見苦しくや」は何に対する述辞なのか。実は、この対象体たる主語は下文の「これを例にて」の「これ」であって、むしろ、此処の文を下文と切り離すべきではないようにも見える。が、語調としては、上文の「入道の聞かず見ぬ世にかけ離れたうべるのみ」に感嘆しているので、やはり上文に付けるべきで、為に主語を＜この入道の超然生活＞と補語して明示する。

世の中の人、これを例にて（しかし世の中の人はこの明石入道を手本として）、心高くなりぬべきころなめり（受領身分でも中央出世を高望みしそうな気運のようです）。よろづのことにつけて（入道一家のすべての言動を）、*めであさみ（讃え驚き）、*世の言種にて（世間ではまるで代名詞のように）、「明石の尼君」とぞ、幸ひ人に言ひける（「明石の尼君」と幸運な人の事を呼んだのです）。　*「めであさみ」は「愛で（誉める）」ては「浅む（意外で驚く）」。　*「よのことぐさ」は＜世間での決まり文句＞。此処では、「明石尼君」という固有名詞を一般名詞のように代名詞化する、ということだ。

かの致仕の大殿の*近江の君は（あの藤原殿家の近江の君は）、双六打つ時の言葉にも、「明石の尼君、明石の尼君」とぞ、賽は乞ひける（双六を打つ時の言葉にも「明石の尼君、明石の尼君」

と言ってサイコロ振りで良い目を願っていました)。　*「近江君」は常夏巻二章二段で「小賽、小賽」と盤双六に打ち興じるハスッパさで衝撃の登場をしたが、その場面を思い出させる演出だ。もう十年前のことなので今なら近江君も推定で 26 歳ほどになっているだろう。が、変わっていなさそうな語り口。この後に、この人物が絡む場面が有るのかどうか分からないが、取り合えず此処では話のオチに引っ張り出された印象だ。